

髪を持ちて家に帰り、子の為に法事を備へ、其の髪を宮に入れ、仏の像の前に置き、謹みて誦誦を請ふ。母の慈深きが故に、惡逆の子に哀愍する心を垂れ、其の為に善を修ふ。誠に知る、不孝の罪の報はなほ近し、惡逆の罪彼の報無きにあらず、と。

力女掬力を試る縁 第四

聖武天皇の御世に、三野国片泉郡小川市に一の力女有り。為人大なり。名けて三野狐と爲ふ。是れ昔三野の狐を母として生れし人の四継の孫なり。力強きこと百人の力に當る。小川市の内に住み、己が力を持み、往還の商人を凌解けて、其の物を取りて業とす。時に尾張国愛智郡片輪里に一の力女有り。為人少し。是れ昔元興寺に有りし道場法師の孫なり。其れ三野狐の人の物を凌解けて取ると聞きて、試むと念ひて、蛤五十斛を埒りて船に載せ、彼の市に泊つ。また備けて熊鷹の縄縫二十段を副納む。時に狐來り、彼の蛤をみな取りて売らしむ。然らうして問ひて言はく「何より來る女ぞ」といふ。蛤の主答へず。また問へども答へず。重ねて四遍問ふ。すなはち答へて言はく「來る方を知らず」といふ。

狐礼無しと念ひ、打たむとして起ち依る。すなはち二手をもちて待ち捉り、葛縄を以ちて一遍打つ。縄に肉著く。また一の縄を取りて一遍打つ。縄に肉著く。十段の縄をもちて、打つに随ひてみな肉著く。狐白して言さく「服はむ。犯せり。惶し」とまうす。是に狐の力に益ることを知る。蛤の主の女言はく「今より已後、此の市に在むこと得され。もし強ひて住まば終に打ち殺さむ」といふ。狐打ち取められて、其の市に住まず。人の物を奪はず。彼の市人惣みな安穩を悦ぶ。夫れ力人の文、世を継ぎて絶えず。誠に知る、先の世に大なる力の因を殖え今に此の力を得たり、と。

漢神の祟に依り牛を殺して祭りまた生を放つ善を修む て現に善と惡との報を得る縁 第五

攝津国東生郡撫田村に、一の富める家長公有り。姓名詳ならず。聖武太上天皇の世に、彼の家長漢神の祟に依りて禱りて祀る。七年を限りて年ごとに殺し祀るに一の牛を以ちてす。合せて七頭を殺し、七年に祭り畢る。忽に重き病を得たり。また七年の間を遑て医藥方をもちて療せどもなほ愈えず。

みゆく人を引きあける描写を含み、イメーシの結びつきがみられる。六、不孝を描く上巻二十三縁に、「天知地知」として、やはり「天」が述べられていた。

一 僧を請じて仏事をおこなつたのであらう。

二 中巻三十三縁に、死者の頭を轉宮に納め仏前に置いた、と述べられている。遺体あるいは遺骨の一部分、あるいは遺骨を宮に納めて仏前に安置することが追善の儀式の一部分としておこなわれたか。

三 追善のために、僧に誦經をねがって布施する。

第四縁 上巻三縁、三縁、を承ける記述を含んでいる。今昔物語集・二十三・十七に書承。

四 「掬力」は仏典にみえる語。たとえば大般涅槃經・如來性品。腕力を競う意に限定されない。

五 岐阜市。

六 未詳。下文より推せば皇良川の沿岸に所在。

七 未詳。へ、上巻三縁。この割注によつて本

説話が上巻三縁に結びつけられる。それはまた

上巻三縁が道場法師にかかわる説話に結びつけ

られることでもある。八 玄孫。曾孫の孫の子。

九 二、上巻三縁には「是人強力多有とあつた。

十 先祖と同じ能力を有することになる。

十一 威圧して打ち負かす。「凌シヘタク」(名義抄)。

十二 国史記書紀本訓撰「解・僧師太社」。

十三 名古里市中区。上巻三縁、中巻二十七縁、

と同じ地。地名異記が異なる。依拠資料の用字

の反映か。一三 大きい者と小さい者とが争い、

小さい者が勝利をなさぬ、というのは口承の

世界に多くみられる説話の型。一四 上巻三縁

この割注によつて本説話が上巻三縁に結びつけ

られる。一五 食用であらう。書紀・景行天皇五

十三年來に白蛤を鹽にしているのが蛤を食用に

したのが國での初出例。一六 「斛」は量の単位。

一七 斛は十斗、一斗は十升。上巻三十一縁にみえ

る「石」と同一の量を示す単位である。本書で

「斛」「石」の二つとありがみられるのが度量衡の大

小の割注にかかわるか、あるいは別の理由による

ものかは、各一例という例の少なさから判断と

しない。一八 皇良川を潮航したのであらう。

一九 和名抄に馬鹿草、久米草、良とみえる植物

は現代でも同じくクマツツラと呼ばれている。

武田祐吉は本説話の「熊鷹」はそれとは別で「大

きな鷹性植物である」とし、諸注は武田説に追

随するが、再考の必要がある。道場法師の孫女

の体格を、武田説はじめ諸注は大きく考えすぎ

ているきらいがある。室町物語の小男の草子

の主人公のように、一尺程度の身長と考えるべき

ではないであらうか。その程度の体格の女の持つ

腰としてクマツツラは不適当とはいえない。上

巻三縁にみえる道場法師も伝説の巨人タイタラ

ポッチとイメーシを重ね合せて理解する説はあ

やまりであらう。道場法師もおそらくは小さい

体格の少年であらう。二〇 しなやかな弾性のあ

る縄。二一 播磨國風土記・六采郡に(御方)の

里の地名起源説話に「黒鷲三条(はく)」を述べる。

黒鷲(名義抄ではツノヲ)を数える助数詞が

「かたであることがわかる。熊鷹翼の翼も「か

たで数えてよいであらう。二二 師手。万葉集・

三・三三二(二手)」。三 狐の体の肉が削ぎ落さ

れ、骨にその肉が着く。三 原文「服也」(犯也)。

四 中巻二十七縁にも降服する犯人のこと

ばとして「犯也」(服也)とみえる。二五 打たれて

鎮められる。「服」は戦いをやめる意。三 仏典

語。たとえば妙法蓮華經にみえる。三 系統。

モ「先世殖大力因」の具体相は示されていない

惡逆子愛妻將殺母謀現報被惡死緣第三

吉志火麻呂者、武藏國多麻郡鴨里人也。火麻呂之母者、早部真君也。聖武天皇御世、火麻呂、大伴名姓不分明、筑紫前守所点、心經三年、母隨子往、而相飢養、其婦者、留國守家、時火麻呂、雖已妻去、不昇妻愛、而究逆謀、思殺我母、遭其喪服、免役而還、与妻俱居、母之自性、行善為心、子語母言、東方山中、七日奉說法花經、有大会、率母聞之、母所欺、念將聞經免心、洗湯淨身、俱至山中、子以牛目、眦母而言、汝地長跪、母瞻子面、而答之曰、何故然言、若汝託鬼耶、子拔橫刀、將殺母頸、母即子前長跪而言、殖木之志、為得彼莫並隱其影、養子之志、為得子力、并披子養、如侍樹漏雨、何吾子違思、今在異心耶、子遂不聽、時母佐僚、著身脫衣、置於三处、子前長跪、遺言而言、為我詠裏、以一衣者、我兄男汝得之也、一衣者、贈我中男、貺也、一衣者、贈我弟男、貺也、逆子步前、將殺母頸之頃、裂地而陷、母即起前、抱陷子髮、仰天哭願、吾子者、託物為事、非實現心、願免罪貺、猶取髮留子、々終陷也、慈母持髮歸家、為子備法事、其髮入宮、置仏像前、謹請諷誦矣、母慈深故、於惡逆子、垂哀愍心、為其修善、誠知、不孝罪報甚近、惡逆之罪、非無彼報矣、

1 早一早

2 留一留

3 餅一餅

4 子(米國)一ナシ

5 而(米國)一ナシ

6 母頸(米)一母々

7 頸之頃(米)一頃之

8 宮一若

9 深(米國)一深深

10 無(米國)一無無

力女拘力試緣第四

聖武天皇御世、三野國片晨郡小川市、有一力女、為人大也、名為三野狐、是三野國狐為母生之四姊妹也、力強當百人力、住小川市内、恃己力、凌弊於往還商人、而取其物、為業、時尾張國愛智郡片輪里、有一力女、為人少也、是昔有元興寺、遺囑法師之孫也、其聞三野狐凌弊於人物而取、念試之、蛤捕五十斛、載船、泊彼市也、亦儲備副、納熊葛練韃廿段、時狐來、彼蛤皆取令壳、然問之言、自何來女、蛤主不答、亦問不答、重四遍問、乃答之言、來方不知、狐念無礼、打起依、即二手待捉、葛練以一遍打之、韃著肉、亦取一韃、一遍打之、韃著肉、十段韃、隨打皆著肉、狐白之言、服也、犯也、惶也、於是知益於狐之力也、蛤主女言、自今已後、在此市不得、若強住者、終打殺也、狐所打敗、不往其市、不奪人物、彼市人摠皆悅安穩、夫力人文、繼世不絕、誠知、先世殖大力因、今得此力矣、

1 小(米國)一少

2 一力(米國)一力

3 小(米國)一少

4 郡(米)一群

5 一力(米)一力

6 捕(米國)一捕

7 斛(米國)一斛

8 之(米國)一々

9 之(米國)一々

10 益(米國)一蓋

11 文一多

依漢神崇殺生而祭又修放生善以現得善惡報緣第五

攝津國東生郡撫回村、有一富家長公、姓名未詳也、聖武太上天皇之世、彼家長、依漢神崇、而禱之祀、限于七年、每年殺祀之以一牛、合殺七頭、七年祭畢、忽得重病、又逕七年間、醫藥方療、猶不愈、喚集卜者、而破祈禱、亦弥增病、於茲思之、我得重病、由殺生業故、自臥病年、已來、每月不闕、六節受齋戒、修放生業、見他殺含生之類、不論而贖、又遣八方、訪買生物而放、迄七年頃、臨命終時、語妻子曰、我

1 舍(國)一貢

2 動(米國)一ナシ

3 頃(米)一ナシ

死之後、十九日置之、莫燒、妻子置之、猶待期日、唯歷九日、還蘇而語、有七人非人、牛頭人身、我髮繫縛、捉之衛往、見之前路、有樓閣宮、問是何宮、非人惡眼眦、而逼之言、急往、入于宮門、而白召之、吾自知之閻羅王也、王問言、斯是殺汝之讎、答曰當是、則膽机与少刀持出白、急割許、加殺我賊、膽而敵之、時千万余人、勃然出来、解縛繩、曰、非此人咎、所崇鬼神、為祀殺害、爰余居中、而七非人、与千万余人、每日訴靜、如水火、閻羅王判斷之、不定是非、々人猶強白言、明知、是人作主、截我四足、祀廟乞祈、賊膽食者、今如切穴、猶欲屠啗、千万余人、亦白王曰、我等委曲、知非此人咎、識鬼神咎、王自思惟、理就多證、經八日、已、其夕告詔、參向明日、奉詔而罷、九日集会、閻羅王、即告之言、大分理判、由多数證、故就多数、判許已訖、七生聞之、管舌飲唾、切膽為効、嗽安為効、慷慨捧刀、而建各言、不報怨哉、我誓不忘、猶後報之、千万余人、衛繞於我、左右前後、自王宮出、乘輦而荷、擎幡而導、讚嘆以送、長跪禮拜、彼衆人皆、作一色答、爰吾問曰、仁者誰人、答、我等是汝買放生、不忘彼恩、故今報耳、自閻羅闕還甦、增發誓願、從此已後、効不祀神、歸信三宝、已家立幢、成寺安仏、修法放生、從此已後、号曰那天堂矣、終無病、春秋九十余歲而死也、如鼻奈耶經說、迦留陀夷、昔作天祀主、由殺一羊、今雖作羅漢、而後得怨報、於婆羅門之妻所殺云々、如最勝王經說、流水長者、放十千魚、々生天上、以卅千珠、現報流水者、其斯謂之矣、

4 閻(國)一門

5 白(國)一自

6 折(來)一利

7 膽(來)一膽

8 共(來)一ナマス一呪

9 人(來)一ナシ

10 宋一完

11 刀一力

12 曾(來)一当

13 猶(來)一独

14 雙(來)一拳

15 答(來)一若

16 奈耶(來)一李那

17 卅(來)一卅

18 者(來)一最者

至誠心奉寫法華經有驗示異事緣第六

聖武天皇御代、山背國相樂郡、有發願人、姓名未詳也、為報四恩、奉寫法華經、為納大乘、遣使四方、求白檀紫檀、乃得諾樂京、以錢百貫而買、喚工巧人、規令造函、以奉納經、々長函短、納經不得、檀越大悔、又訪無由、故發誓願、依經作法、屈請衆僧、限三七日、悔過哭曰、亦令得木、歷三七日、請經試納、函自少延、垂不得納、檀越增加、精進悔過、歷三七日、納乃得納、於是奇異疑思、若經短矣、若延函矣、即請本經、与新經以均量之、猶伴不失、誠知、示於大乘不思議力、試于願主至深信心、更不可疑也、

1 詳(來)一桂

2 檀(來)一檀

3 木(來)一木

4 延函(來)延函一函若延函

智者辨妬妄化聖人而現至閻羅闕受地獄苦緣第七

釈智光者、河内國人、其安宿郡鋤田寺之沙門也、俗姓鋤田連、後改姓上村主也、母氏飛鳥部遺也、天年聰明、智慧第一、製孟蘭盆大般若心般若等經疏、為諸學生、統弘佛教、時有沙弥行基、俗姓越史也、越後國頸城郡人也、母和泉國大鳥郡人、蜂田藥師子也、捨俗離欲、弘法化迷、器宇聰敏、自然生知、內密菩薩儀、外現聲聞形、聖武天皇、感於威德、故重信之、時人欽貴、美称菩薩、以天平十六年甲申冬十一月、任大僧正、於是智光法師、發嫉妬心、而誹之曰、吾是智人、行基是沙弥、何故天皇、不謝吾智、唯譽沙弥、

1 連(來)一連

2 聰(來)一聰

3 統(來)一統

4 子(來)一ナシ

5 妬(來)一妬之

6 誹(來)一非